孤独な愛され女王蜂　9

孤独な愛され女王蜂　9

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19510459

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, ♡喘ぎ, オメガバース, 濁点喘ぎ, 芹霊, 受けの浮気

誰得？俺得！なオメガバースパロです。オリジナル設定含みます。ヨシ霊ですがビッチ師匠総受けです。今回は本番は芹霊です。♡喘ぎ、濁点喘ぎ、受けの浮気あり。倫理がまたもやアレ。お好きな方はお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

孤独な愛され女王蜂　9

ピ、とヨシフがスマホを切る。
「恐らく番の上書きが行われた」
警察の知り合いに何が起こったのか、確認してくれたのだ。
「これまで例が無いわけじゃないらしい。番化が不十分だと起こることがあるとか。たしか事故で噛まれたって言ってたな？」
「うんまあ……俺は事故だったと思ってる」
モブがフェロモンでトチくるって、『アンタは僕のものだ』って言いながら、貞操帯を超能力で無理矢理外して、すごい力で俺を押さえ付けて噛んできたのだ。
「霊幻の方に番になる意思が無かったのなら、５０％しか番化して無かったのかもな。その場合は、わずかだが、上書きできる可能性があるらしい」
どうしよう。
ヨシフと番になっちゃった……。
「……ニヤニヤしてんな、先生？」
「……ヨシフこそ」
俺たちは抱き合って、柔らかく唇を重ね合う。
「こんなに幸せでいいのかな、俺」
笑う目じりに涙が浮かんでしまう。嬉し泣きだ。
「……いいんじゃないのか」
苦笑するヨシフが優しく撫でてくる手に、頬を擦り寄せる。
「完璧に番化したとしたら、もしかしたら俺のフェロモン、ヨシフしか誘惑しなくなったかも」
「そりゃいい！」
「……ヨシフ？」
「あ、いや、すまん喜び過ぎた。お前はフェロモンを使ってアルファの客を寄せてるんだったな」
「そうなんだよなぁ……これじゃあ相談所は続けられない。転職を考えないとな……」
「……仕事のことなんだがな、霊幻、」

ヨシフが何か言いかけた時に、けたたましく携帯のアラームが鳴る。
「えっ、もうこんな時間！？とりあえず相談所行かねぇと！！すまんヨシフ、話は後でな！」
「……、ああ」
俺は慌ててシャワーを浴びて、スーツに着替えて飛び出した。

※

「という訳で、多分俺のフェロモン、ヨシフ以外のアルファを誘惑しなくなってるんだよ」
相談所に駆け込んで、事情を説明する。
エクボ、芹沢、トメちゃん、そして何故かまだ朝早いのに大学があるはずのモブとテルくん、律くんが来ていた。
ぐいっとモブに手を引かれて、うなじの噛み跡を確認される。
「……僕のが消えかけてる」
悔しそうに唸って、モブはがばっと口を開けて俺のうなじを噛もうとした。
「は！？」
「とーう！」
トメちゃんがモブの膝の裏を蹴って止めてくれた。
「モブくん何やってんの！？同意なくうなじを噛むのは犯罪行為よ！？！？」
「……すみません」
び、びっくりしたー……。
「ま、まあそういうわけでだな、フェロモンで客寄せが出来なくなったんだ。だから相談所を閉めようかと思ってて……」
「「「「「え！？」」」」」
みんなの顔色が一気に悪くなった。
「そんな、ちょっと待ってください。一回せめてこのまま営業続けてみて、本当に続けられないか確かめてからでもいいんじゃないですか？」
トメちゃんが引き止めてくれる。

「師匠、僕、ここが無くなるの嫌です」
「……それにほら、お前らも俺のオメガフェロモン吸えなくなったんだぞ。……これまでと違って、ここにいるメリットが無くなるだろ」
きゅ、とトメちゃんが口を引き結ぶ。
「……私が霊幻さんのフェロモン目当てにここに来てると思ってたんですか？」
「……理由の一つではあったろ」
アルファのトメちゃんは何か言いかけて黙る。
「構わないです、師匠。確かに師匠のフェロモンは魅力的でした。でもそれを目当てに僕たちは来てたわけじゃないんです。だからとりあえず……今まで通り続けませんか？」
ううん、と俺は唸って少し考える。
……転職にも時間が必要だろうしな。
「分かった。しばらくはこれまでどおりにしよう」
「そうしましょう」

「これまで通り、僕たちは霊幻師匠が好きで、師匠は僕たちを好きじゃない。……それが続くだけです」

ぼそりとモブが何か呟いたが、俺には良く聞こえなかった。

※

トメちゃんが帰って。
エクボ、芹沢、モブ、テルくん、律くんが揃ってる場で、言わなくてはならないことがあった。
「ごめんな、俺、好きな人ができたから、もうお前らとは寝られない。……今までありがとな。今この時をもって、相談所と縁を切って貰っていいから」
意外なことに、みんなキョトンとしていた。
「言ったじゃないですか、師匠。これまで通りでいいって。別に僕たち師匠を抱けなくても、相談所は手伝いますよ」

「そ……うなのか。なんか悪いな、今までと違って身体でお礼できなくて」
「いいえ、そんなことはないですよ……」
何故かにこにこと笑うモブたちが、妙に不気味に見えた。

※

彼氏のアルファ２人に『別れよう』とメールして、ヨシフのアパートに向かう。
ボストンバッグを持って出て行こうとしたら、丁度ヨシフが入ってきた。
「……何してんだ」
「いや、俺の内定が終わったら、ヨシフここに帰ってこなくなるんだろ？そろそろ本格的にテルくんのところに居候させてもらおうかと思って」
「……………………そうだな」
何か言いたげに口を開きかけて、でも言えずにヨシフは肯定の言葉を紡ぐ。
「今までありがとな。これ返すわ」
犬のキーホルダーを付けた合鍵をヨシフに差し出す。
ヨシフはそれを見て、なんとも言えない顔をした。
ヨシフはがっと合鍵を掴んで、

そのキーホルダーの輪を、俺の左手の薬指に通した。

「えっ」
顔が赤くなる。
見ると、ヨシフも照れてほんのり赤くなっていた。
「これはお前にやる。ここは俺のセーフハウスの一つだ。これは秘密だが、周りは警察関係者ばかりだから、お前のアパートよりかなり安全だ。……宿がない時とかは、ここを使うといい」
「あ、りがとう」
「少し気が早いかもだが」

ヨシフは怖い顔になる。
……多分、照れ隠しだ。
「今度、婚約指輪を買いに行こう。取り敢えずそれは代わりだ」
俺は、はにかんでこくんと頷く。
そっとヨシフに口付けて、アパートを後にした。

ヨシフと連絡が取れなくなったのは、その後すぐだった。

※

彼氏たちから『なんで突然』ってメールが返ってきてて辟易する。
一度会って説明しないとかなあ……。
「ただいま」
テルくんから借りている合鍵でマンションに入る。
「おかえりなさい！晩御飯できてますよ」
テルくんが先に帰っていた。
「え、悪いな。今度から俺も作るから……それに、宿代身体で払えないから、やっぱり半額出すわ。それでいいか？」
「………………わかりました、それでいいですよ。それより今日は一緒に映画観ながら食べませんか？帰りに借りて帰ったんです、ハンバーグが人を襲うやつ」
俺が肩から下ろしたボストンバッグを、クローゼットにテルくんが超能力で運んでくれる。
「有名なやつじゃん。いいね」
「クローゼット、その一角は霊幻さんが使っていいですからね」
ありがたい。さっそくスーツを掛けさせてもらおう。
テルくんは手洗いうがいをした俺を自然に抱きしめ、頬にキスをしてくる。
「お風呂も準備できてますので、お先にどうぞ」
「ホントに悪いな」
ニコッとテルくんは笑う。ホントにいい子だなー……。
「あのさ、テルくん」
「なんですか」

「俺、次の宿探すの時間かかりそうなんだよ。だからさ……」
にこ、と何処か不気味にテルくんが笑う。
「ずーっとここで暮らしてくれていいんですよ」
「……そういうわけにはいかないだろ。テルくんにもすぐ彼女ができるだろうし」
俺は苦笑する。
「僕は霊幻さんが好きですから。それは考えなくていいですよ」
固まった。
「テルくん、冗談……じゃ、ないんだな」
俺の心がしくしくと痛む。
恋心を知った俺は、テルくんの気持ちを粗末には扱えない。
「……テルくんの気持ちを利用はできない。俺はすぐココを出て行く」
「何言ってるんですか。僕は霊幻さんと一緒に暮らせるの嬉しいんですから、そんなこと言わないでください」
テルくんは俺の腰を抱き、手をするりと絡めてくる。
「さ、お風呂に入って、一緒に映画を見ましょう。気にしなくていいんです、さあ……」
「ウン……」
そう言ってくれるなら……。
それでいいのかな……。

そうしてテルくんに甘えて、いつも通りの生活を送って。

２ヶ月が過ぎた。

彼氏とも別れた。ヨシフとは相変わらず連絡が取れない。

……寂しかった。

ふらふらと俺は発展場に行ってしまう。
もうフェロモンが無い俺には価値がないのに。分かってるのに。

俺は人肌が恋しくてたまらなかった。

『男ＯＫ』のカクテルを頼んで、席に座ってすぐ。
隣に男が座った。

「芹沢……」

にっこりと何処か不気味に芹沢は笑う。
「俺、性病とか心配無いんで安全ですよ」
「……」
俺はこくりと頷いて。芹沢の腕に手を絡めた。

ホテルに着いてから。
俺はじわじわと罪悪感に苛まれてきた。
ヨシフの顔が浮かぶ。
「あのさ、芹沢、俺、ヒートになっても芹沢を興奮させるフェロモン出ないし……きっと芹沢、勃たないと思うから……」
「問題ないですよ。俺は霊幻さんが好きですから、フェロモンが無くても全然勃つんで」
絶句する。
「そんな、そんなお前の気持ちを利用するようなこと……」
ひどく愉快そうに芹沢が笑ってビクッと震えてしまう。
「大丈夫、今までと変わりませんよ。俺たちは霊幻さんが好きで」
ベッドに押し倒されて首筋に唇を這わされて、久しぶりの人肌に吐息が漏れてしまう。
「霊幻さんはそうじゃない。ただそれだけです。俺たちは霊幻さんの身体が目当てだったんですから、これでいいんですよ」
ああ……。
芹沢の熱い手がまさぐるのが気持ちいい……。
「ウン……」
俺の身体に価値があるのなら、これでいいのかもしれない……。
「霊幻さん……ようやく正気のあなたを抱ける」

芹沢は性急にネクタイを抜いて、スーツを超能力で一気に脱がせてくる。
「芹沢……電気消して」
「嫌です。全部見たい」
俺は目を伏せて顔を逸らす。
はやく……終わらせてしまおう。
「綺麗だ」
芹沢の少し荒れた手が俺の頬を撫で、首筋をたどり、ひたりと胸の上で止まる。
「心臓がとくとく言ってて、可愛い」
芹沢が目を細めた。
「なん、だよ……それ……」
「何もかも可愛らしくて、いじらしく見えるだけです。気にしないでください」
いや、なんだよ、それ。
「あ……っ」
芹沢の手のひらが乳首をこねる。
じわじわとした焦ったい刺激が、俺の腰をもじもじと揺らさせる。
「口でも吸って欲しいですか？」
「あ……っ」
思わず芹沢を見つめて、その唇を見つめてしまう。
ふ、と優しげに芹沢は笑って。
「……分かりました。口でもいじめてあげますね」
熱い舌が乳首を覆って、そのまま少しカサついた唇が乳輪を覆う。
「ぁ、ああっ」
ずくずくと腰に熱が溜まる。
「気持ちいい……っ」
「ふぉれは良はっは」
じゅるじゅると乳首をなぶりながら喋られて、ん、んっと声が漏れた。
「あっ、あ、あ、あぁ……っ、は、ぅっ」
……ちんちんも触って欲しい。
イきたくて鈴口がちくちくしてきた。

「は、ぁ……っ」
ようやく芹沢が顔を上げる。
ローションを指に絡めて、俺のアナルにゆっくりと挿れてきた。
「ぁ、あ……っ！」
俺はたまらなくなって、自分で陰茎を擦り始めた。
き、きもちよくてっ♡
腰が揺れるっ♡
「霊幻さん、エッチですね」
「あ、っ♡」
ぐり、と芹沢が慣れた手つきで俺の前立腺を中指でえぐってくる。
「あ、ぅ、あ……っ♡」
ちゅこちゅこと自分で性器をこする手が止められない。
「霊幻さん、びゅーびゅーしたいですか？いいですよ、俺に出すところ見せてください」
「……っ♡、でる……っ！」
ゾクゾクと鳥肌を立てながら絶頂した。腹に吐き出す精液が濃くて恥ずかしい。
「気持ち良かったですか？」
おれはこくこくと頷く。
「あのさ、ちょっと休憩……」
「駄目ですよ、俺まだ挿れてもいないんですから」
「あっ、ン！♡」
射精後の重だるい腰にズブっと指を増やされる。
「はっ、は、ぁっ♡」
芹沢の太くてごつごつした指が、容赦なく何度も前立腺を押し込んだ。
「せ、芹沢ぁっ、も、挿れていいからぁっ……♡」
「何言ってんですか、全然ほぐれてないですよ。いつももっとゆるゆるですからね、霊幻さん」
かぁっと顔が赤くなる。ヒートの時には身体が男を受け入れる態勢になるから、セックスの難易度が下がるのだ。
「そ、れは……っ」
「ほら、やっと３本目が入りますよ」

思わず俺はヒート誘発剤を取ろうとしてしまう。
その手を芹沢に絡め取られた。
「駄目ですよ。ちゃんと俺を見てください」
ちゅ、と手に口付けられると、どうしてもヨシフを思い出して、心がざわめいた。
「は、う……！」
指３本の圧迫感は結構なものだ。
思わず声が出てしまう。
「あ、あ、あぅ、あ、ぐぅっ、」
ちょっと脂汗が出てきた。不快感と同時に、大きな快感の波がじわ、じわと腰から上がってくる。
「……そろそろ大丈夫かな」
ずるっと指が抜けていって、芹沢はぐちゃぐちゃに脱ぎ捨てた自分のスーツからコンドームを取り出してくる。
……芹沢が用意したやつで大丈夫かな……ま、いいか。
芹沢はちょっと手間取りながらゴムを逸物に装着して、ぐいっと俺の足を持ち上げた。
「あ、あ゛！」
ぐぷ、と音を立てて太い先端が俺を犯してくる。
「ぁ……っ、か、は……っ！」
息が、
息が、出来ない……っ！
「霊幻さん、大丈夫ですから。いつもみたいに、言ってください。気持ちいい、って」
「きもち、い゛い゛……っ」
ずん、と。
突然挿入部から甘い痺れが落ちてきた。
「ぁあ゛……っ♡」
ぞわぞわと髪の毛が逆立つ。
「……っ、動きますよ、霊幻さん」
「あぁあぁアァッ♡♡♡」
身体の中を太い杭が、ずるるっと動いていく感覚。
「すごいっ♡♡♡♡」

もっと、もっと欲しいっ♡♡♡
「霊幻さんっ」
ずどん、と一気に奥まで打ち込まれて思わずのけ反った。
「んあ゛っっっっっ♡」
ぐぽ、と身体の奥から背筋を這い回る奇妙な快感が上がってくる。
「霊幻さん、霊幻さんっ」
ずどん、ずぷん、と激しく身体を貫かれて、きゅっと勝手に痙攣する足がシーツをたぐり寄せる。
「きもちっ、きもちいいっ♡よしふ、よしふ……っ♡♡♡」
髪を振り乱して目の前の身体に抱きついて。
はた、と血の気が引いた。
「あ……」
にっこりと芹沢は笑っていて。
「他の男の名前を呼ぶなんてひどいなあ」
穏やかに笑って俺の鼻を摘んできた。
「ふぐっ」
思わず開いた口にキスされる。
「ん……♡んぅっ……」
舌を絡め合わせて、だらだらと唾液をこぼしながら探り合うキスに目をつぶれば、愛しいタバコの香りが脳内に満たされる。
よしふ……っ♡
「んぁ……っ♡」
刹那的な快感と幸福感に浸っていたら。
「駄目ですよ、霊幻さん。ちゃんと俺を見て」
目を開けさせられた。
「ほら、俺のちんこ、気持ちいいですね？」
「うん゛……っ♡」
俺は素直に頷く。快感で頭がぼーっとしてきた。
「ナカがキュンキュンしてきましたね？そろそろイくのかな……気持ちいいでしょう？誰のちんこでイくんですか？」
「せ、せりざわっ、せりざわぁっ♡♡♡」
「そう、いい子です、ねっ！！」
ずん、と奥の入っちゃいけないところに打ち込まれて。

「あ―――っ♡」
一気に快感が崩壊して、俺は絶頂に押し流された。
「うわっ、すごい搾り取ってくる……俺も出ます……あ」
お腹の中にじわあっと一気に熱が広がって、嫌な予感がする。
「すみません、霊幻さん……ゴム破れちゃったみたいです」
あー。
ま、そういうこともあるか。
「そ、っか……♡」
俺は絶頂の余韻でピクピクしながらも、身体から芹沢のを抜いて自分のスーツを引き寄せる。
胸ポケットからアフターモーニングピルを取り出して飲むのを、

芹沢はじっと見ていた。

続